

Title	英国田園都市運動の発生 (上)
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.11 (1922. 11) ,p.1608(108)- 1618(118)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19221101-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

業に従事する五十三萬九千七百七十五の加入者を有する百〇五の團體が、組合から給付を受け、國立失業基金から賠償せらるゝことになつた。さうして従來組合の給付を受けざりし被保險職業に従事する八萬六千の組合加入者は、新にこの法令の適用を受けることになつた。一九一四年には組合の二百冊の缺員簿が失業者の記名を受けられるために紹介所に托せられ、一九二〇年にはその數七千冊に達し、二百四十萬の加入者に對して七百七十六團體が失業給付を行ひ、當時の總組合勞働者五百二十五萬に比して、四十五パーセント強に當つてゐる。

失業者が組合より支給せらるゝ給付は、一定の條件あるものに限られる。たゞ明かに意思に基かざることを證明したる失業に對してのみ支給せられ、失業者は缺員簿に記名し、勞働組合は失業者の職業を見出すために、合理的に有效な

方法を講じなければならぬ。さうして組合が賠償せらるゝのは、失業給付として支給したるもの、四分の三以下に限られる。これは組合をして失業給付額を出來るだけ低率に維持せしむるためである。(J. L. Cohen: - op. cit., pp. 271-277) (未完)

英國田園都市運動の發生(上)

奥井復太郎

田園都市の運動は極めて最近のものである。かの産業革命が生み出した新しい社會は新制度や組織に慣れなかつた爲め、到る處に多くの悲惨な又は醜態な記録を残した。當時に於ける工業及び農業勞働者の生活の如きは悲惨を極めたる

記録となり、自然の美とか歴史的傳統とかを無視して Commercialism が發展した所には悉く醜惡な光景が展開して行つた。近代の産業都市は其の内部に悲惨なる勞働者の生活を包含すると共に都市そのものが秩序や傳統や又所謂市民的精神の缺除した、濛々たる煤煙と巨大なる工場と殺風景な事務用の大建築物以外には何物も誇るものを持たぬと云ふ醜惡さを示した。此様な都市を中心とし貪婪飽く事を知らない營利的精神によつて動かされて行つた現代文明がラスキーン、モリスの様な人々に嫌忌されたのは不思議ではない。田園都市の運動は此の醜惡と悲惨とを具備した近代都市發生後の運動であつて、其は漸く都市の整理に着眼しはじめた都市計畫に對しては殊に其の自然的環境の美と利益とを高く唱し又過度の人口集中を避けて、大都市計畫に向つて容易に賛意を表はさぬ點に於いて特色を

持つてゐるものである。この運動が従つてラスキーン、モリスの思想に負ふ所頗る大であるが又近世に於ける最大のユウトピアンの一人である佛蘭西のシヤアル・フリエが唱へたフアランスの信奉者が英國に建設せんとする田園都市の企畫に對する先鞭を爲すものであつた。以下記述せんとする所は英國に於ける田園都市計畫が實際的運動としての發生に到る經過で The Garden City: A Study in the Development of a Modern Town (著者は C. B. Purdom 一九一三年出版)の最初の二三章の抄譯に過ぎない。田園都市の企畫が具體化する以前に時々主張された Model Town の企畫や Industrial Village の計畫に就いては非常に興味ある研究の方面がある。しかし不幸にして目下筆者の手元には之の方面に關する材料が非常に乏しい爲め詳細に

亘つての歴史的研究は他日に譲らねばならぬ。又歴史的研究以外に實際の問題として田園都市の建設が吾々に提供する問題の範圍は極めて廣い。近來所謂文化生活の呼聲に醒されてか

從來の郊外生活を更に一步進めて多少組織立つた計畫を屢々耳にする。前にも一寸述べた様に田園都市は大都市計畫の遂行に對して多少疑問を懷いてゐる様であるからして大規模の都市計畫が完成した曉に於ても田園都市論者の主張には聽く可き所があるであらう。計畫發表の割に實際に都市整頓の行はれない我國にあつても最近田園都市計畫を聞く様であるが吾々はかゝる計畫に對する要求の強さが果して何程のものであるかを疑問とする。又更に後になつて明かにされるであらうが田園都市の内容が我國に於いては明瞭にわかつてゐない様に思はれ往々誤解されてゐると考へられる。Garden City と Garden

Suburb 又は Model Village 等との區別が判然としなければ田園都市運動の眞意義は理解せられないのである。

二

『防禦や生活の享樂や宗教上の必要と云つた様な見地からみると、都市は從來常に多くの大道が四方に放散し又人々の眼の惹かれる中心點であつた。文明は都市に於いて發生し科學藝術も亦其處に於いて創造された。商業も其處に於いて盛になつたし、政治とか社界とか又分離してゐる人々の間にデモクラシイと稱せらるゝものなどを作り出したのも都市であつた。人々が自由な空氣に浴し得てゐたのは常に都市に於いてゐつたし又、都市が強大であつた時は常に其の國は繁盛を保つてゐた。

人々は種々の立派な事物に就いて考量を廻して來たが都市と云ふものは彼等の考へうる内で

最も立派なものである、然もかつて建設せられた都市でもつて人間の魂を十分に満足させ得たものは無き』(C.B. Purdom; The Garden City; Chap. I. i. p. 1. 大意譯)

Purdom 氏の此の言葉は多くの社會研究家が一文明の特色なり其根本の原動力なりを一つの事實又は原因にのみ結びつけてしまふ自畫自讚的色彩を帯びないではないが、都市の發生と云ふものが今日にまで到つた人類文明の進みの中の比較的初期に現はれ爾來文明の進展に並行して來てゐるのは事實であり又近世に到つて都市の意義が非常に増加したのも事實である。

この文明の進みと共に新しく出來た都市と云ふものを昔から多くの人々が理想化する事を考へた。『人々は彼等が其の全生涯を幸福と平和の内に暮せる様な或る美しく且つ立派な支配を受けた都市を想像して來た』(前掲書)。

然し都市が人類の生活に於いて非常に重大な役目を演じ又都市の問題が文明の主要問題となるに到つたのは近世都市發展後に於いてである。善かれ悪しかれ現代の文明は都市の文明によつて代表されてゐる、其の都市は年と共に其の重要さと規模とを増大して行く、大都市の中心に於ける人口は輓近減少の傾向を示してゐても大都市の發展は其の外輪の擴大によつて示されてゐる、大都市の境界に接して盛に形成せられる所謂郊外なる地域は行政的管轄の異等を問はず寧ろ大都市の勢力の農村地域に及ぼせる擴大と見る可きであつて一見農村の人口の都市流出に對する阻止と觀せらるゝ現象の如きも等しく都市勢力の農村地に及ぼす影響の結果に外ならない。

かく、都市が田舎及び田舎の住民に及ぼす影響は決して近代に始まつたものではない。たゞ

其の影響の程度は一定地域——例へば一地方或は一國——内に於いて都市と農村とが各々占める勢力の割合によつて決定するものである。都市の勢力が微弱で交通の機關の具備せられなかつた時代には都市の勢力範圍は其の都市自體と僅に其の近傍とに止まつてゐた。『旅行施設の發達や社會的吸引力の増加や其他多くの經濟的變化等と共に都市の勢力は増大した。』英國に就いてみれば之れは十八世紀の終結以後の事で工業上の發達農業耕作法の變化等が都市をして優勢ならしめたのであつて其の以前にあつては工業の大部分が家内經營により又全人口の半數以上はなほ農業と何等かの直接の交渉を持ち大部分は土地財産などを所有してゐた。十八世紀が終るこ——大體から云へば——家内經營による大部分の工業が消滅して從來享得してゐた諸種の權利を剝奪された人々は農村から一掃された、

茲に(英國の)中部及北部の大都市の形成が生じて來たのである。所謂産業革命を成就せしめた原動力に就いては筆者は Purdom 氏と等しく茲に其れを詳論しない。Purdom 氏は此の社會制度の變化が少數の人々に富を齎らして茲に大多數の民衆の貧困を伴ひ第十九世紀が社會改良の方策によつて根絶する事を企圖した諸種の弊害の基礎を置いたと云ふ點を注意せしむるに止めてゐる。『商業及び土地所有者に屬する階級の興味を全然惹きつけてしまつた富の追求は民衆の境遇如何に無頓着に行はれた。彼等が幾何かでも民衆の事を考へてゐたとすれば其は彼等の隸屬を重くする方法に就いての關係に於いてのみであつた。』

斯の如き事情の中から發生した近代の工業的大都市は自から特有の方面と其れに關連した問題とを含んでゐる。之れに附隨して起つた十九

世紀の特有の問題は住宅問題である。元來人類が住居を營む以來常に住居の問題は存在する、しかし其の住居の問題が人類の生活力に從來見る事のなかつた程最も重大な脅威を及ぼす程度に達したのは工業都市の建設以後の事である。(前掲書三頁)此の意味に於いて『住宅に關する

都市計畫の主要なる問題は直接に勞働者に適當なる家屋を充分に供給する仕事と關連してゐるのである』(John-Nolen New Ideals in the Planning of Cities, Towns and Villages. p. 83)近代衛生學の發展に連れて社會の眼前に其の重大の危険を示された大部分の民衆の住宅状態は各種の法律や公私の諸企畫、刊行物に依る其の危険の絶叫等にも拘らず依然現代文明の恥辱と思はれる程悪いものである。

更に悪いのは單に過去の無知な時代に計畫もなく出來上つて行つた都市構成が極めて悪かつにあつては吾々は彼等の口實を踏襲する事を許

されない、彼等の持つてゐなかつた科學や藝術を吾々は享得してゐる、過去の教訓は赤裸々に吾々の眼前に横はる。吾々は如何にして矯正すべきかと云ふ此の問題の性質を充分に把持し更に之れを處理すべき點に於いては遙に充分な支度を持つてゐる。少くとも吾々は「恐ろしい瘡」(“blotches of hideousness”)でない都市を建設しようと思掛けるならば成就しうる地位にゐるのである。其れは吾々の意志に懸つてゐるのであつて之れを行ふ意志のない所には依然として舊來の不幸なる道を辿る都市建設が行はれてゐるのを見る。(前掲書四頁)

三

『田園都市と云ふものが考察せらるゝのは、先づ工業中心の都市が形成せられ、其の都市に固有の弊害が発見せられた時に起つた一つの運動の究極としてゐる。』

十六世紀の Sir Thomas More に於けるが如く十九世紀の社會狀態に對する批判として不可能な且つ實現の出來ない境遇を書いた Bellamy や Morris 等の諷刺家の理想的社會や空想的都市は近世工業的英國の勃興と共に起つた新しい時代の要求に應ずる都市の建設に對して下された經驗的の提案とは全く異つたものである。田園都市の運動は Russett 氏の云ふ如く『少數の熱心家の出來心や空想に其の端を發するものではない』が是等の諷刺家の批評が社會をして彼等の生活する周圍の情況に對する觀察を深からしめた事は田園都市の運動にとつて決して看過すべからざる意義を持つてゐる。實際的計畫としての方面を暫く措けば田園生活の精神の普及がラスキン、モリスの勞作に少なからず負ふ所であると云ふ點に就いては吾々は佛國の經濟學者ジード氏の説をとる者である。

兎に角、田園都市運動の實際的方面に就いての先驅とも認む可き十九世紀初めに於ける諸種の實際的計畫は實行せらるゝ意志を有し又往々實施せられたものもあつたけれども未だ本當に成功する機運と準備とを持つてゐなかつた。此の機運は明かに十九世紀末二十世紀の開始に於いて熟した、十九世紀末に或る一人の人の手に纏められた時代の精神と要求とは二十世紀に入ると共に實施されて充分なる成功を納めるに至つた實際的計畫の提案となつた。十九世紀初期の諸種の實際的提案や企畫は正にこの時代的精神と其の要求の先驅を爲すものとして尊重すべきである。

此種の初期の提案の第一は當時の活動家であつた Robert Owen によつて爲されてゐる。彼は千八百十八年に a Report to the Committee of the Association for the Relief of the Manufacturing and

Labouring Poor の中で人々の過度に密集した都市を救ふ爲に千五百人の住民からなる小村落團體の形成を提案してゐる。一エイカー三十磅で千二百エイカーの土地を買ひ入れ此の共同團體は個人と教區と州(County)と地方(district)と政府とによつて組織せらるゝのである。此の計畫を實行するに就いて彼は二十五萬磅の金額を必要としたが遂に五萬磅を以つてその計畫に着手しなければならなかつた、然も其の金額は大部分彼の醸出に倚つたのであつた。第一の村落は千八百二十年 Motherwell の近傍の Obiston と云ふ地に創められた。然るに發起人側の不和や其他の原因で此計畫は餘り充分に進捗せずして千八百二十八年に終つてしまつた。Owen の計畫は一部分、千六百九十五年にロンドンで發行された小冊子 Proposals for raising a College of Industry for all Useful Trades and Husbandry,

with profit for the Rich, and plentiful living for the Poor, and a good Education for Youth. Which will be an advantage to the Government, by the Increase of the People and their Riches に現はされた John Bellers の建築に基いたものであると(前引用書五一六頁)

十九世紀の初期に於いては建築上の各協會(Societies)が極めて活躍を爲してゐたが更に進んで千八百四十五年の九月にロンドンの建築家 Moffatt 氏は首府ロンドンから四哩乃至十哩の距離の内に村落を建設する事を目的とする組合を造る提案をした。此の計畫は一千萬磅の總費用で以て三十五萬人の住宅を設備すると云ふ極めて大規模なものであつたが着手されず又其の詳細の點は今日失はれてゐる。別に相當の規模に於いての計畫が三年後に企てられた。其れは Essex 州の Ilford 停車場の近傍に五千乃至六千

人の住民を持つた住宅村落を建設する目的で一株五磅資本金二十五萬磅の組合が計畫されたのである。千八百四十八年十二月の Edinburgh Magazine 上の一文は其の計畫の特殊の内容を傳へてゐる。

『田舎の風趣を奪ふ程大き過ぎず、社交的機會を減してしまふ程に小さ過ぎず、廣々した空氣や土地、森林と水流、學校と教會、藪林と花園等に圍まれた美しい一纏りの住宅』

家屋に就いては三種類の様式が考へられてゐる。第一のは家賃が一年に四十磅、第二は同じく三十磅、第三は十二磅十志から十八磅、尤も此の家賃には Eastern Counties Railway によつてロンドンに通ふ定期乗車券が家賃の等級によつて一等二等三等と含まれてゐるのである。更に發起人は株式又は賦排法によつて借家人が彼等の住家を購入し得る便宜を與へる事になつて

ゐた。此の計畫は誠に『他の建築業者の不完全な設計によつて惱まされ干渉される事なく、自己の計畫を遂行しうる利益と科學と資本との與へる凡べての利益』を有する大規模の一建築組合であつた。瓦斯と上水とは組合の手によつて供給され下水設置は『最初から完全に』設備せられてゐる。土地は『出來うる限り必要に應じて』教會、學校、集會所及び Open Spaces の用に殘される筈である。救貧税も極めて僅少の額で足りるであらう。

此の計畫に對する反對には可なり聴く可きものがある、即ちもしかゝる計畫が成功し更に之れを模倣するものが出來たならば恐らく大都市に住む職人の最上級の部分丈けを其處に移して『彼等よりも貧困なる者は依然として濕氣多く、狭い不健康な住家に詰め込まれてゐる』であらうと。

之れに對する Edinburgh Magazine の寄稿者

は答へて彼等(職人中上層階級)は『彼等の利益を計つて貰ふに價してゐる。彼等は人間社會の雄蜜蜂ではない。彼等は社會に寄つて生活せずして社會が彼等に頼つてゐるのである。彼等は組織の親柱であるが故にあらゆる釘を巧みにうつてしつかりと彼等を留めなければならぬ。』若し此の連中が古い都會から去つて行けば『壓力が輕減して家賃は低減し現在よりもつと良い家屋が彼等の後に續いて行く事の出來ぬ者の爲めに殘される事となるであらう』と。

Edinburgh Magazine に此の所説を載せた筆者は樂觀的態度に於いて此の計畫を眺めてゐる。『...若し大都市に於いて高く賃貸されてゐる土牢が貸せないとすれば直に毀されるであらう。若し良き住宅を得るに必要な改良を要求しなければならぬ様な状態にあるとすれば其の改

最も容易に得られよう。然らば吾々は國民の血が矢鱈に然も屢々必要もないのに流された昔の最も激しい戦争よりも更に盛に年々又機會の悪い時に色々の形で吾々の人口の多くを減少せしめる熱病や虎疫と云ふ敵を少なくする事が出来るであらう。」

Purdom 氏は此の計畫が充分に熟した事の證據を今までに見出し得ないとしてゐる。Ilford は今日に於いてはロンドン近傍の最も大きく且つ人口の最も多い都會地の一であるが若し千八百四十八年の提案が其の地を最初の Garden Village とする事に成功してゐたら今日の Ilford 地方の人口増加はそれ程望ましい事ではないであらう。(以上 Purdom, The Garden City. Chapter 1, The Villag. Associations) (次號完結)

經濟學の自然科學的基礎 (上)

(比較經濟學序論)

上 原 好 咲

「私は經濟現象及其法則の領界に物理學的並に生物學的研究方法を適用することに依つて經濟學に從來より一層廣く一層科學的な根底を與へやうと企てた。そして此物理學的並に生物學的研究から更に進んで經濟學の基礎を社會心理學及文化人類學に検討した。此二重解釋即ち物理的且つ社會的解釋は、社會學を根本的に進歩させ夫れに一層正確な科學的妥當性を與へる唯一の正しい方法たるのであつて、社會學的科學の一つである經濟學も従つて同一の取扱を受けねばならぬ。然り余は生物學及心理學の社會學への適用上に於ける最近の進歩の光明に照らし

て經濟學を革新せんと計劃したのである。そして其の結果生産と分配、消費と價值、労働と人口の諸問題に關する經濟學上の新理論及新概念を得た。

「併し經濟學の此擴充及經濟學上の諸問題を一切の生物學的並に社會學的現象の科學的研究に適用されねばならぬ方法に依つて検討するといふ事は、余の此計劃に取つては一つの前提に過ぎないのであつて、乃ち余は此前提の上に立つて經濟學を更に廣い更に充分な見地から研究せんとするものである。其の廣く充分な研究とは其の内に、文化の程度乃至種類を異にする各郷土に於ける人種的並に國民的差別に關連する經濟制度の研究を含むものであつて、此研究は歴史的且つ比較的研究方法の必要にして多々益々一切の文化科學に適用されねばならぬものであることを教へる。そして斯くて始めて吾々は

比較經濟學なる新科學の基礎を確立し得るのであつて、此比較經濟學は其の姉妹科學である比較法律學、比較政治學、比較美學、乃至比較宗敎學と共に文化的分配の不公平な地帯を開發するであらう。蓋し經濟を含む社會的人間の進化の全體は、生物界の進化過程と同様に複雑差別多岐であつて、従つて吾々は人間の歴史、制度、環境、習慣等を夫々相異なる典型と形式とを特有する各差別的の地域に區劃せねばならぬ、そして其れ等と比較照合することに依つて初めて社會科學に普遍的原理を求め得るのである。

「乃ち茲に於て吾々は『郷土經濟學』換言すると經濟組織上相異なる典型並に楷梯の構造及作用に關する科學的研究、に遭逢する。吾々にして先づ歴史的且つ比較的研究方法に依り豫め標本的の經濟地域及形態から引出され且つ其れ特に適合する中間的公理及統一を設定して置かぬ限